

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 川口悠子

### 広島「越境」——占領期の日米における谷本清のヒロシマ・ピース・センター設立活動

本論文は、第二次世界大戦終了後の占領下の日本で、谷本清が創設しようとしたヒロシマ・ピース・センターの歴史を調査することで、戦後直後の日米関係史における「広島」と「ヒロシマ」の意義を日米関係史のなかで捉えたものである。

ヒロシマ・ピース・センターは、米国占領下で被爆者救援運動や平和運動がまだ困難であった1949年に設立された。それが可能になったのは、米国で教育を受けたプロテスタントの牧師であった谷本の個人的な資質に加え、その活動を可能にした当時の日米関係があった。本論文は谷本清のヒロシマ・ピース・センターというひとつの事例に焦点を絞り込みながらも、戦後の日米関係という大きなテーマにも丁寧に注意を払い、日米関係史をはじめとする様々な分野に極めて重要かつ有益な知見を提供するものである。その際、筆者は「越境」という概念に着目し、日米という国境のみならず、分野の境界をも横断することで、国際的で学際的な論文をかきあげることに成功している。

本論文は序章と終章をのぞき、6章から構成されている。第1章は、谷本の越境を可能にした背景を、原爆投下以前の彼の経歴から探る。谷本が日米双方で活動することを可能にした理由のひとつは、明治初期の宣教活動以来、彼の所属するメソジスト教会を含む日米のキリスト教界のあいだに形成されてきたネットワークにあった。これが谷本のエモリー大学への留学(1937年～1940年)を可能にし、そしてこの留学を通じて得た人脈は、戦後の谷本の活動の土台として重要な役割を果たした。

第2章では、谷本の活動の方向性が、占領という状況にどのように規定されていたのかが、地方軍政、情報統制、そしてキリスト教政策という三つの側面から検討されている。広島は地方軍政制度を通じて占領管理体制のもとにあった。また、原爆による被害状況や、投下に関しての米国批判は、とりわけ厳しい情報統制の対象となった。そのいっぽうで、戦争で途絶えていた日米キリスト教界の交流は、マッカーサーの庇護の元で再構築され、谷本の「越境」の土台となった。

第3章は、谷本が平和運動や被爆者救援活動に献身するようになった動機と、それが日米に

またがるものになった背景を、被爆から渡米（1948年9月）までの、広島地域社会の中での彼の活動から探る。谷本の活動の主な動機のひとつは、被爆体験にともなう罪悪感だった。戦後、谷本はジョン・ハーシー（John Hersey）のルポルタージュ、「ヒロシマ」（“Hiroshima”）の登場人物として米国で高い知名度を得た。これは米国での谷本の知名度を高め、また米国社会には広島への同情的な関心があることを谷本に実感させる効果も持った。戦後初期、谷本は流川教会の再建や教会事業・社会事業を進めていたが、しだいに超教派的で大規模な平和運動にも関与するようになり、その際米国のキリスト教界との結びつきや、占領軍のキリスト教への後押しを生かしていた。このような状況が、米国に「越境」という発想を谷本にもたらしたと筆者は指摘する。

第4章は、国際世界平和デー運動（International World Peace Day Movement, 1948年3月～）という平和運動に着目し、米国社会の原爆被害に対する認識を明らかにしている。国際世界平和デー運動は、米国の新聞が谷本の発言を報道したことをきっかけに始まった。この運動が掲げた「ヒロシマ」というシンボルは、原爆被害そのものではなく、東西の緊張の高まりを背景とした世界情勢への不安を象徴するものだった。だが、1940年代末期、米ソ対立がさらに顕在化するとアメリカ人は核兵器の存在をむしろ受容し、国際世界平和デー運動も急速に勢いを失った。「ヒロシマ」に対する米国社会の認識は国際情勢に強く影響を受けており、かつ短期間のうちに大きく変容しつつあった。

第5章は、谷本の2回の米国訪問の経緯と、ヒロシマ・ピース・センター設立の過程、すなわち、「広島」をシンボルとした、広島と米国の民間レベルの協力関係はどのように成立し、その関係は何を意味していたかを論じる。

第6章は、ピース・センター設立後に谷本が広島で批判を受けた理由を、米国との関係を軸に検討している。広島市当局と谷本のあいだに摩擦が生じたのは、市当局も、復興財源の確保に際して占領軍の存在を強く意識していたためだった。谷本は米国との貴重なパイプだったため、市当局は協力姿勢を示していたが、市の復興計画とピース・センター計画が競合するようになったことで摩擦が生まれた。いっぽう、広島市民からの谷本に対する批判は、多分に、ピース・センターが米国社会の影響を強く受けて実現したことに起因していた。

以上のように、本論文は谷本清とヒロシマ・ピース・センターを「越境」という概念を軸に検討し、戦後すぐにそのような組織が設立されたのは谷本個人の資質に加え、広島市の状況、さらに日米関係および冷戦構造が深く絡んでいたことを明らかにした。谷本という一個人について、これまでまったく調査をされてこなかった一次資料（個人資料）をもとに分析する一方

で、同時にそのような個人の主体的活動を可能にした政治および社会構造を、占領軍関連の文書をはじめとする多様な資料を使いながら明らかにしている。またクリスティナ・クラインが論じた「冷戦オリエンタリズム」という理論を援用することで、谷本とノーマン・カズンズ、パール・バックなどのアメリカの「ミドル・ブラウ・インテレクチュアル」との交流の意義を分析している。

その結果、本論文は原爆被害をめぐる記憶の形成過程を、ナショナルな枠組のみでとらえることの限界を強く示している。個人史、ローカル史に加え、日米史など多様な枠組みを織り交ぜることで、往々にしてナショナルな記憶として本質化される言説を巧みに脱構築している。

審査委員会では上記の点を含め、これまで数多くなされてきた広島研究のなかで、極めて不十分であった時期に焦点をあて、それを「越境」という理論的枠組みなかで考察する本論文に高い評価を下した。その一方で以下のような問題点も指摘された。

形式面では、誤字や脱字に加え、一部事実誤認が指摘された。また参考文献の分類方法に疑問が呈された。また、内容面では、以下のような問題点が指摘された。1) 個人資料に大きく依存しているが、研究としてはこの論文はいかに位置づけるべきか。アメリカ史なのか、日本史なのか、平和研究なのか。学際的で境界横断的であるがゆえにわかりづらい。2) 谷本は非常に評価の難しい人物というのはこの論文からわかるものの、著者自身が最終的にどのような評価を下しているかは明確ではない。3) 同時代の同様の人物にも注意を払うべきうではなかったか。とりわけ戦後のクリスチャンとして著名な賀川豊彦との関係を考えるべきであった。4) 広島への焦点はそれなりに完結しており、説得力もあるが、例えば長崎がなぜ論じられないのか。比較の視点がもう少しあるべきではないか。5) 「冷戦オリエンタリズム」の理論をさらに説明すべきであった。とくにノーマン・カズンズのような日米の架け橋として尽力した人間を「オリエンタリスト」と定義してしまっているのか、疑問が残る。

以上に指摘された問題点に対し、論文提出者は、いずれも誠実に、これまでの研究成果をもとに回答した。それらは、今後の研究の進展をより期待させる内容であった。

上記のように本審査委員会において指摘された問題点は、本論文の高い学術的貢献度を妨げるものではない。貴重な一次資料をもとに、戦後直後の広島をローカルとトランスナショナルの両面から考察する本論文は、日本史、アメリカ史、日米関係史、広島史、平和研究など多分野に大きく寄与する労作である。

したがって、本審査委員会は、川口悠子氏の論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。